

入学式 式辞

新入生の皆さん、入学おめでとう。

早春の緑のシャワーを浴びながら、バス停から学内の通路を歩いていくと、左手に白く咲くユキヤナギ、右手に黄色く咲き乱れるレンギョウ、そしてちまたで咲いているサクラのソメイヨシノに比べると華やかさはないが日本の野生の桜の代表ともいえるヤマザクラ、そして「ホーホケキョ」の鳴き声。「春告げ鳥」と呼ばれ、四月から七月までさえずるウグイス。ほどなく正面入り口、そしてオーブンテラスのある緑に囲まれたカフェテリア、フランスのルーヴル美術館を思わせるガラス製のピラミッドのエントランスから地下へと入るとここ芙蓉館ホール。斬新なデザインの建物と緑あふれる自然豊かなキャンパスが広がっています。

本日は、大学の須藤後援会長、高橋同窓会長、学校法人山村学園より岡理事長、山村寛前理事長、山口理事、藤野理事、山村正巳本部長の皆様にご臨席をいただいております。

さて本学の最大の特長は、季節の移り変わりを肌で感じる緑豊かな「森の学園」と言えるでしょう。

本学にはガビチョウという七色の声を出す鳥がおります。今までいたウグイスを追い出し、我が物顔でさえずっています。もともとは中国で鳴き声を楽しむために飼育していたのが野に放されて日本にもわたってきたとされています。特徴はメジロと同じように目の周りが白いだけでなく、メガネのフレームの部分も白いです。せひ声を聴き、姿もとらえてみましょう。その他、短大の近くに石坂の森という里山があります。その食物連鎖の頂点にオオタカが住み着いています。時々、短大の上空をゆったりと輪を描いて飛んでいる様子も見受けられます。また六月から七月にかけてゲンジやヘイケ等のホタルが六種類も幻想的な淡い光を放ちます。野ウサギやタヌキ、アライグマも出没します。

そして今、皆さんのいる地下にあるこの芙蓉館、その入り口近くには、この名の由来である「芙蓉の木」が夏になると赤白ピンクの大きな花を咲かせます。

まさに四季折々の様子を見せてくれる学園です。

アメリカの自然科学者の女性に、レイチェル・カーソンという人がいます。その人の書物に「センス・オブ・ワンダー」があります。その一説を紹介します。

美しいものを美しいと感じる感覚 新しいものや未知なものにふれたときの感激
思いやり、憐み、讃嘆や愛情などの、さまざまな形の感情がひとたび呼びさまされると
次はその対象となるものについて、もっと知りたいと思うようになります。

「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではない
まさに感性の重要性を説いています。

「感性」・・・人間の持つ知覚的な能力のひとつで、物事に感じる能力、感覚です。
乳幼児に関わる保育者にとって、子どもに寄り添いながら共感・共有するには、豊かな感性が求められます。

私たちが暮らしている地球には、様々な国や地域があり、様々な文化が存在します。それらの文化は、様々な国や地域で暮らす人々が持つセンス・オブ・ワンダーによって見つけ出され、ヒトの知恵によって育まれてきた貴重な財産です。私たちはこの地球をいつまでも光り輝く美しい惑星として残していくために、必要なもの、価値あるものを見失わないように、一人ひとりの心の中にあるセンス・オブ・ワンダーを大切にしなければなりません。

さて、保護者の皆様に一言ご挨拶を申し上げます。入学、本当におめでとうございます。大学生といってもまだ大多数が十八歳、山村短大とご家庭で、手を取り合い、健やかな成長に力を注いで、見守っていただくことをお願いしたいと思います。世間では「待機児童」や「保育士不足」等保育を取り巻く諸問題が取りざたされております。今後の対策が待たれます。

新入生の皆さん、「さいたま景観賞」を受賞した、緑あふれるこのキャンパスを愛し、入学して良かったと思える学園生活を、先輩と一緒に創ってくれ、そして本短大の校歌にも歌われている「友よ やまむら」にあるように、人生にとってかけがえのない友をつくってください。

本学の自然豊かな「森の学園」での二年間で感性を磨き、保育の心を十分に育んでいくことを期待し、式辞といたします。

平成二十九年四月一日

学校法人 山村学園 学長 野口一夫